

北里大学教養図書館

閲覧ニュース

37号

1982. 12



「ジュリアス・シーザー」演出日記

— 稽古場裏話 —

福 田 逸

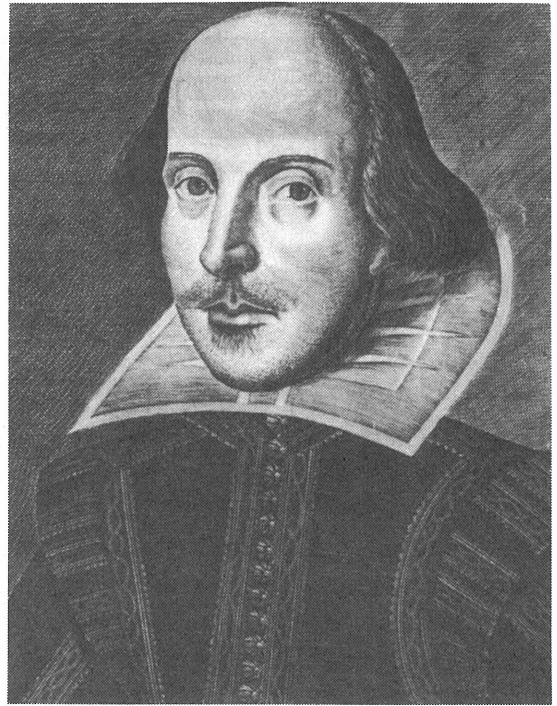
昨年秋に私が演出を手掛けたシェイクスピアの「ジュリアス・シーザー」(劇団すばる公演)の、今年秋の再演と高校巡業が決まり、八月後半から改めて稽古が開始されました。その稽古場での出来事や舞台には現われない苦労話などを、日記風に書き連ねてみます。

○月×日

稽古開始を一ト月後に控えて、スタッフ(いわゆる裏方や演出関係)会議が開かれる。今回の公演は再演であるため、左程難しい問題はなく、初演時に解決出来なかった問題や、初演の評判などから手直しの必要な点を洗い出す作業がスタッフ会議の主な内容である。

演出の立場から幾つかの注文を出す。一つは舞台装置。昨年は客席に向って傾斜のついた円形の舞台で、その円の左右に一部水平になった壇のあるものであった。この円形全体に黒のビニール・レザーを被せ、銀色の塗料で汚した抽象的でシンプルな舞台を使った。昨年はこれのみで全場を通し、あとは僅かに二つの場面で椅子やテーブルを出しただけである。例の有名なアントニーの演説の場も、左右にある約八寸の壇を使い、特に演壇らしきものは使わなかった。それを、今回は演説の場に階段状の演壇を出すよう装置家に希望を出す。演説する者と群衆の間に高低の落差があった方が芝居がしやすいと考えたからである。

もう一つの注文は衣裳係へのものである。シーザー暗殺の場とアントニーに煽動された群衆の暴動の場で、前回、中途半端と(演出家には)思われた血糊を徹底して、出来れば少々グロテスクなくらいに使うこと、従って衣裳の汚れや洗濯等の問題、場合によっては同じ衣裳を二着作ることの(経済的、時間的)



シェイクスピアの肖像

可否、さらに多量の血を流すことの、つまりその多量の血糊を如何に隠しておき、如何に自然に流すかという問題の研究をして欲しいということ—私の方からの注文は主にこの二点で、血糊の方はかなり難しい問題だが、何とかやってみようということになった。今回の公演の観客は半数以上が高校生となるわけで、会議に出席していた舞台監督のAは「舞台全面血の海になるくらい大量の血を出しましょう、劇画世代の今の若い人相手なんだから、出血大サービスと行きましょう」と乗りに乗っている。その傍らで渋い顔の製作担当のS氏、すかさず釘をさして曰く「衣裳を二着づつ作ったりして、支出の方の出血を大きくしないで下さいよ。」

○月×日

稽古初日—芝居の演出を始めて十年近くになるが、未だに稽古初日は嫌いだ。本番の初

日よりも落ち着かない。皆、よく知っている役者ばかりなのに、何故か初対面の様な気分になる。ある芝居のために集まったメンバー、一定期間そのメンバーのみである世界を共有し、一種の共同生活を送る、そのスタート地点に立つわけで、どこか、見合いとか結婚式とか、そういった儀式にも似た堅苦しさと新鮮さとが縋い交ぜになっているからだろうか。

本来なら延々と演出意図、装置等、色々説明しなくてはならないが、再演の気楽さ、前回との違いのみを説明し、あとは旅公演用に上演時間を短かくするための台本のカットを発表して稽古を早めに切り上げる。ただ、再演とはいえ、久しぶりに「シーザー」のメンバーが一堂に会してみると、やはりその40名近くの人数には圧倒される。しかも殆ど男ばかり、このグループを引張って行くのは並大抵のこのではない。昨年つくづく思ったことだが、演出とは、頭脳よりはむしろ体力と声量（ついでに有無を言わさぬ現場監督の凄み？）を何よりも必要とするものなのではあるまいか、「シーザー」はそういう思いを強くさせる戯曲である。相手は一癖も二癖もある連中ばかりだ、単身敵陣に乗り込んでしまったような昨年の気分が突然蘇って来る。

○月×日

役者とは不思議な存在だ。ダメを出す時にも相当の神経を使う。煽てた方がよくなる役者もいれば、けなした方が良くなる役者もある。ダメを出さずに放っておき、自分で何かを掴むまで見守った方がいい役者がいるかと思うと、一つ一つ事細かにダメ出しした方がいい役者もいる。ダメが出ないと言って落ち込む役者に、ダメが出ないのは自分が上手いからだとか自信過剰の役者、実に千差万別だ。そういう連中を一つに纏め、舞台に統一感を与えなくてはならない。この統一感（アンサンブル）を生み出すための要素の一つに、稽

古場の雰囲気がある。それを良い状態に保つことも、演出家に課せられた仕事の一つである。沢山の人間が毎日4、5時間を共に過していれば、党派が出来たり、村八分にされるものが出て来たりする。それを丸く納め、裏方の失敗を冗談で笑い飛ばしてやり、一人一人の役者の健康状態に気を配る。全ては少しでも良い舞台を創るため—とはいっても、こちらも人の子、疲れることもあれば、相性の悪い役者とぶつかることもある。腹が立つほど、何度も同じダメを出さなくてはならない役者も多い。何事も忍耐か。

○月×日

昨年一応完成させただけあって、読み合わせの日数は僅か四日しか取らなかったのにも拘らず、かなりのカット（中には一行おきに少しづつ科白をカットしたところもある）を克服して、稽古開始より約一週間で大抵の役者は科白を覚えてしまった。ブルータスだけはさすがに科白の量が多いせいか、四苦八苦しているが、こればかりは手助けのしようがない。早く覚えてくれとただ祈るのみ。



アントニー演説の場面

今日、久しぶりで通し稽古をし、時間を計る。15分の休憩を含んで2時間40分前後。高校の先生方の要望に応えるにはあと10分短縮しなくてはならない。高校生が観劇できる限度は2時間半なのだそう。出来不出来には関係ないという。まあ何とかなるだろう。最初の高校公演までにまだかなりの日数があ

る。あと10分位は科白のテンポを上げることと場面の転換をスムーズにすることで（そして15分のはずの休憩のベルを2分早く鳴らすことで！）短縮できるだろう。

○月×日

科白のカットによって動きが大幅に変ることがある。そうなると、音響や照明にも影響が出て来る、「シーザー」の場合、三場の夜中の嵐の場面に使われる雷光と雷鳴が問題になった。昨年、雷の鳴るきっかけとなった科白がカットされているため、全体を洗い直した上、今日、稽古前に改めて照明、音響と合わせをする。

この雷といえば、昨年の上演でおかしなことに気がついた。普通、吾々が知っている雷といえば、遠雷ならゴロゴロという雷鳴だけ聞こえ、少し近いと先ず稲妻が光り数秒から数十秒のうちに雷鳴がなる、極く近距離のものだと、ピカとゴロゴロが殆ど同時になるわけで、さらにゴロゴロはバシッといった音になる。ところが舞台でこの日常のリアリズム通りにやると何とも間の抜けたことになる。すぐ近くに落ちる雷なら現実に吾々の知っている通りに音と光を同時に出せばよい。ところがほんの数秒、いや一秒でも光を先行させると、後から鳴る雷鳴より、先行する稲妻そのものが甚だ間の抜けたものになってしまうのだ。のみならず、音だけというのは遠、近、至近、いずれも気にならぬが、光の方は至近距離のみ自然に見える。そこで本番前日の舞台稽古になって遠、近の場合にも光と音の間に殆んど間を置かないでやることにした。「芝居」の「嘘」の一つというべきか。

○月×日

芝居の嘘といえば、シェイクスピアの作品には、その原作そのものに、とんでもない嘘がよくある。この「シーザー」にも幾つかあるが、その代表格は「時計の音」であろう。シー

ザー暗殺の陰謀を企てたキャシアスやキャスカが夜中にブルータスの家を訪ねる謀議の場があるが、相談がまとまった所でブルータスが「静かに！時計が鳴る、数えろ」（Peace！ count the clock.）といい、それに答えてキャシアスが「三つ打ったな」（The clock hath stricken three.）と応ずる。何故それが「嘘」なのか。いうまでもあるまい。当時のローマ（B.C.44頃）に「打つ」たり「鳴つ」たりする「時計」などあるわけがない。シェイクスピアも随分いい加減なことを書くものだ。機械仕掛けの時計は中世以降のものである。

観客の中にこの「嘘」に気附く人がいるかもしれない。気附けば、せっかく緊迫した陰謀の場が白けたものになってしまう。創る側としては、出来るだけ気附かせぬ配慮が必要だ。で、演出家は音響の係に、何種類かそれらしき音を録音してもらい、稽古の終わったあと聴き比べ、最も「気にならぬ」、どこか非日本的な、如何にも外国で鳴っていそうな音で、なおかつビッグ・ベンとか、教会の塔とかを「思い出させない」音を選ばなくてはならない。

○月×日

シェイクスピア劇にもう一つ別種の嘘がある。これは時計の音と違って、観客はもちろん、時には演じている役者も全く意識しないことである。それはシェイクスピア学者の間でもよく問題になるが、「時間の経過」の問題である。

例えばこのシーザーの場合でいえば、この戯曲の冒頭から終末までの時間を史実に従ってみると、およそ次のようになるーポンペイの息子達との戦いから凱旋して来る第一場は前45年のこと。アントニーが王冠を捧げシーザーがそれを拒否する二場は翌年、つまり前44年の2月15日のルペルカリア祭の日のこと。そして四場（夜半～朝3時）、五場（朝8時）、六場、七場（朝9時）そして暗殺の

八場までは同年3月15日の出来事である。さらに九場十場、つまり演説の場と民衆の暗殺者への怒りと暴動の場は五日後の3月20日、葬儀の日のことである。後半、陰謀の首謀者ブルータスとキャシアスが、アントニー、オクティヴィアスに敗れるのは二年後の前42年のことである。

ところが、シェイクスピアの戯曲では、一、二場は同一の日（2月15日）、三場はその夜、四場の謀議はそれに続く真夜中、そして五、六、七、八場と経過する間にいつの間にか3月15日になっているのだが、観客の心理としては、これが2月の16日のように思える。あるいは一、二場が3月14日だったと思える。九場の演説は暗殺当日のように描かれ、十場の暴動はその翌日の払暁のことで、十一場から最後の十八場までは、場所の移動などから数日とも感ぜられなくないが丸一日（せいぜい二日間）のこととしか思われぬ。つまり約三時間の舞台上、史実の上では三年間が過ぎるが、観客の感覚、生理から言えば、ルベリカリアの祭日、その夜の密議、翌日の暗殺と演説、翌々日のブルータスの敗北といった具合に三日間（せいぜい四日？）でしかなく、そこに何の異和感もない。しかもその三時間が同じ比率で経過するのではなく、ある部分では、舞台の数分の間に一～二年が経ち、次の一時間程の間には半日くらいしか経たないといった具合で、支離滅裂とでもいうより他ないのだが、その無茶を無茶と感じさせないところは、シェイクスピアの「嘘」というよりはむしろ「天才」と呼ぶべきかもしれない。彼以外の劇作家でこの手の「無理」をして成功しているものはないと思われる。（逆にシェイクスピア以前の古典劇には、ギリシア劇を範とした「三一致の法則」というものがあり、筋は単一のもの、所は一箇処、時間は一日以内、という規範があり、これが作品に統一感を与えていた。シェイクスピアはこれを全て打ち壊し、なお緊密な構成を失わずにいる。）



ブルータスの死の場面

○月×日

立ち稽古になって一週間になる。殺陣のN氏に頼んで、シーザー暗殺、群衆による詩人シナ虐殺、及び二つの戦闘場面の動きを指導して貰う。ここでも、前回よりは若い観客を意識して、より荒っぽく激しくしてくれと依頼する。民衆に虐殺される詩人シナ役のMは、余りの激しさに満身創夷である。戦闘シーンも、客席から見ていて怖いと思わせるためには、稽古場ではその何倍も怖いくらいでなくてはならない。稽古場の演出席は役者から2mと離れていないのだから。それにしても戦闘シーンは実に危険だ。春に上演した同じシェイクスピアの『ヘンリー四世』では王子役のKは本番で指の骨を折って、そのまま副え木もせずに繃帯だけで二週間頑張っていた。Kは今回はアントニー役、戦闘の稽古も高見の見物を決め込んでいる。四つの場の動きが一と通り決まった。明日はいよいよ実際に血糊を使ってみる予定。帰り際に舞台監督に血糊の準備を確認する。

（英語）

以下次号

のらくら天国紀行

藤代幸一

現代の学園に焼直してみると、さしずめそれは教室へはめったに顔を出したことのない麻雀狂や、単位がとれずに何年も原級にとどまる留年生や、恋愛ごっこに熱中する学生が称賛され、辞書と首っ引きで外国語に打ちこんだり万卷の書を前にして日夜勉学に余念のない学生なんか大学から追放せよ、というような所だと聞いたら学生諸君はどう思われるであろうか。何しろ怠惰が最大の美德であり、勤勉がいちばんの悪徳というお国柄なのだから。

何はともあれ、われわれもこの「のらくら天国」へ旅して、そのありようをかいま見ることにしよう。まずどの家もパンケーキで覆われ、戸口とよろい戸は蜂蜜入りのクッキーであり、床と壁はベーコンケーキで、梁は豚の焼肉でできている。そして焼きソーセージで編まれた垣根に囲まれているというわけである。

泉は極上の葡萄酒で、それがひとりでに人の口の中に流れこむようになっている。ミルクの小川が流れ、焼いて料理ずみのいつでも食べられる鶏や鶯や鳩が飛び廻っている。それでもその鳥を捕まえられぬ怠け者のために、あろうことか先方から飛んで来てその人々の口に入る仕掛けになっている。国中を走り廻る丸々と肥えた豚もよく見ればすでに丸焼きになっており、そのみかどの豚の背にもナイフとフォークが刺さっているのである。

ここでザックスのテキストに関する挿絵をご覧くださいただたら幸いである。印刷都市ニュルンベルクで印刷されたパンフレットに描かれた、ヴォルフガング・シュトラウホの木版

画である。原寸18.5cm×28.6cmほどの大きさである。版画そのものは稚拙のそしりを免れないが文字で見るとはるかにのらくら天国のイメージは浮かぶであろう。左手に菓子家の家を配し、煮たり揚げたり塩漬けにしたり焼けた魚が泳いでいる中央の川をはさんで、逸楽の民たちの楽園図が描かれている。右手を流れるせせらぎは実はミルクの小川で、木にはなんとパンがなって皆が食べられるようミルクの川に流れ落ちるとい^{あんばい}う塩梅である。右上の十字架にかけられたみたいなのは、驚くなかれお百姓さんが木になっているさまを写している。時が来て熟すと下の長靴の中に落



のらくら天国

ちてくることになっている。その前では老人が不老の泉を飲んで若返っている。この国で馬をもつ人は裕福な農家になることは請合いである。というのは馬が簗の中にいっぱい落としている一見馬糞風なものは、実は玉子を産んでいるからである。困みに菓子家の飾りの下にさりげなく皇帝とその印璽があるのにお気づきだろうか。

怠け者の理想郷とも言うべきこののらくら天国とは、実は16世紀の詩人ハンス・ザックスの書いた Schlaraffenland なる108行ほどの詩なのである。ザックスについては昨年二期会によって上演されたワグナーの楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」中の主役として、その名をご存知の方も多いこ

とだろう。本職の靴屋の親方のかたわら、六千をこす詩を書き二百篇ものドラマを残した文人でもあった。ことに笑いを主題とした謝肉祭劇こそザックスの本領が現われ、ドイツではもちろんのこと、わが国でも久保栄訳によって築地小劇場で上演されて以来、特に近年よく上演され観客に笑いの渦を巻き起こしている。やばな講釈をするとそれこそこの天国から追放されるかも知れぬが、Schlaraffen-landを一応語源的に分析してみれば、怠け者+猿(阿呆の意)+国となるわけである。15世紀にはこの語のもとになっているsluraffeが「馬鹿野郎、薄のろ」というような罵り言葉として広く用いられた由である。

もう少し天国の中を覗いてみることにする。この国にはさまざまな楽しみがある。例えば射撃、しかしそのあり方はわれわれの知る方法とは大いに違っている。すなわち的からいちばん外れた人が優勝し、競争ではどん尻のびりが勝ちとなるのである。仕事を怠けてうたた寝をする人には20ペニヒ、尾箆びろうな話で恐縮だが、食いすぎて尻をたれると貨幣1ヘラー、飲みすぎでげっぷ3ヶ出す人は貨幣1ターラーもらえるというのである。それどころか賭博ですってんてんになった者は失った金の二倍が返してもらえ、借金を1年間返せない人には貸主はそれを棒引きにしてやらねばならぬと、どこかの国のサラ金の高利に泣く人が聞いたら嬉し涙にくれるような話もある。

のらくら天国という架空のお伽とぎの国を一べつしたわけだが、ここからだけでも二つのことに気が付く。虚構の世界では美食と金銭が中心になっていることである。享楽と食べることへの関心の深さが際立ち、性愛面が欠落しているのはザックスの個人的な側面があるものの時代的な傾向でもあるように思われる。単に食べることへの充足からもう一段高い美食の食い放題という願望には、生きるために食う時代から食べるために生きる時代へ

の転換がうかがえる。中世末期から近世にかけての時代で人間が人間として生きる喜びを改めて見出した。それが珍味佳肴という美食に反映されたと考えてもよい。そこには明らかにドイツの人文主義者たちの影響が見てとれる。そしてそれを可能にするのは都会人の目からすれば、金銭なのである。それゆえ、怠惰な行為がすべてその度合に応じて金銭に換算されるとの思考様式の意味は大きい。上にあげた以外でも、面白おかしく暮らす人は飲み代として1パツツェン与えられ、人を茶化す人は3クロイツァーもらえ、大ほら吹きは1クローネもらえといった具合である。まさにほら吹きのろの文学、嘘文学の作品の面目躍如たるものがある。と同時に貨幣経済が定着した都市に暮らす人ならではの生活感覚が反映されていると見る。

ところで「のらくら天国」という発想はザックスの専売特許ではない。古く古典時代後期のルキアノスの不思議の国への旅行記に遡るとされ、以来文学や美術のモチーフとなっているのである。文学史をひもとけば、ザックス以前にすでに1494年にS・ブランドが『阿呆船』の第108章でそれに触れ、後にはグリムの童話になっているし、美術の領域ではブリューゲルの「のらくら天国」が有名である。ミュンヘンのアルテ・ピナコテーク美術館にあるそれを、小説家の中野孝次氏は『ブリューゲルへの旅』の中で無可有郷むかうのさととしてあげているのだが、それももちろん楽園の意である。1567年に制作されたとされるこの油彩画では、当代の代表的な三つの階級農夫、聖職者、軍人、つまり働く人、祈る人、戦う人がいのように美味に誘われ飽食のはて木の陰にごろ寝しているさまが描かれている。その他細部もすべてザックスの詩に拠っているように見える。

しかし、理性と労働が拒否され怠惰が珍重される「のらくら天国」を教訓においてとらえよう、というのがザックスの目的なのであ

る。この詩のみならず殆どの作品に共通して教訓性がザックスの特色となっている。そもそも「のらくら天国」の理想郷はだらしなな若者たちをこらしめるために古代人が考え出したものであるとし、物ぐさで不精でのらくらな若者が労働に気を配るように、罰としてその国へ送り込めと言っているわけである。怠惰が怠惰として有効なのは、勤勉であるべしとの規範があるからである。人は働かねばならぬとする要請があればこそ、その対照的な行為である怠惰が意味を持ってくる。勤勉であるべしとの規範が取払われたらどうなるか。のらくら天国ではむしろ怠惰と安逸が規範である。しかもアンチ・テーゼとしての勤勉がないのがのらくら天国でもある。二、三日あるいは一週間、一ヶ月、まあ一年位ごろごろするのは楽しい。しかし、快楽を極限まで追求すると苦痛になると同じように、限りなき安逸と無為は罰のように感じられるようになるだろう。手持ちぶさたのつれづれに苦しむ心境からつい働きたくなる、古人はこのように Schlaraffenland の構造を見たのである。グリムの童話でも現実にはありえないあべこべの世界を提示することによって現実を描こうとした。その意味でのらくら天国もあべこべの世界の現実を描こうとしたとも言える。靴屋の親方という人生を歩んだ人の体験に根ざす実直な教訓は貴重かもしれないが、反面陳腐な道德臭はぬぐい切れず、この詩も結局は怠惰の戒めとなっているわけである。

最後にこの「のらくら天国」へ行かれんとする読者のためのガイドブック。所在地は「クリスマス」の3マイルうしろ。ただしその「クリスマス」がどこにあるかは不明。旅費、滞

在費、パスポート、査証等いっさい不要。個人、団体いずれも可。入国資格は無分別、能なし、鯨飲馬食、怠惰、ごろ寝好き。以上の条件をみたした上、3マイルはあろうかというキビの粥^{かゆ}の山を食って突破すれば忽ちにしてのらくら天国へ到着すると、原詩には書かれている。それでもあえて挑戦しようとなさる方はどうぞ。
(ドイツ語)

文献

S. ブラント

阿呆船 尾崎盛景訳 現代思潮社 1968

中野孝次

ブリュージュへの旅 河出書房新社 1976
720.4/N39

お知らせ

1. 冬休み長期貸出しについて

期間 12月15日(水)から1月12日(水)迄。

冊数 1人5冊迄。

2. 開館時間の変更

12月18日(土)から1月8日(土)迄は、閉館時間が午後5時になります。但し土曜日は午後1時です。

3. 年末年始に付き、次の期間閉館します。

12月25日(土)から1月4日(火)迄。

編集後記

今回は、英語ご担当で劇団すばるの演出をされている福田先生にそのご苦心談を、又独語の藤代先生に「のらくら天国紀行」をお書き頂きました。藤代先生には『テイル・オイゲンシュピーゲルの愉快ないたずら』やHans Sachs『謝肉祭劇集』(942/Sa12)等の訳書がお有りです。

表紙：レーム大聖堂(1225-99, フランス)の柱頭。建築の装飾として草木を用いる場合、ある植物の概念ではなく、それぞれの個体を生き生きと、リアリスティックに表現するゴシック自然主義の特色が、各部分によく窺われる。

閲覧ニュース37号	1982・12発行	北里大学教養図書館
発行責任者	小野健一	〒228 相模原市北里1-15-1